

堀川をめぐる人びと

堀川開削410年をふりかえる

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

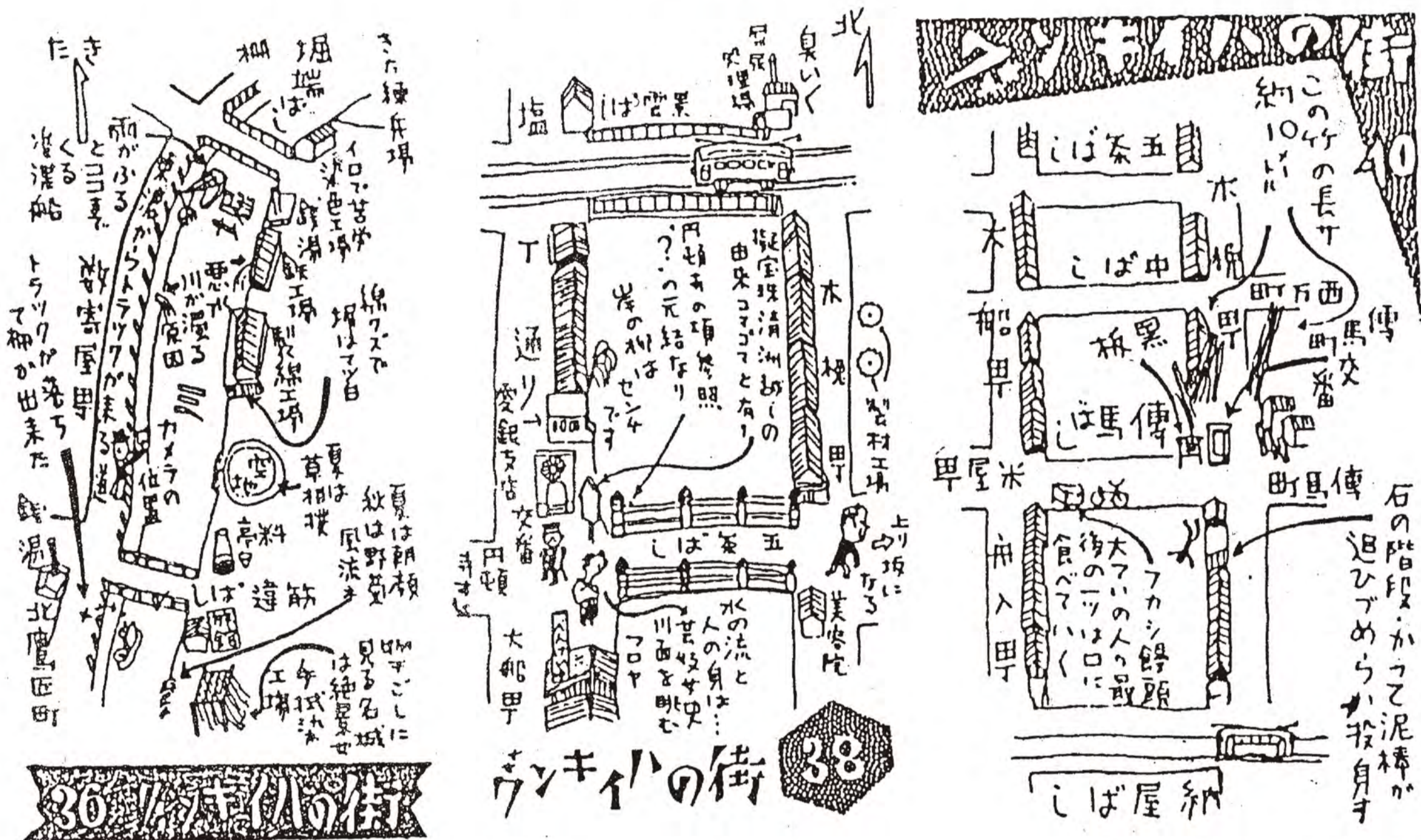
堀川再発見にハマった文化人 亀山巖と沢井鈴一

亀山巖 いわお 詩と装画とモデルノロジオの渾然

彼自身による紹介

『亀山巖の絵本』(昭和50年刊)巻末の自身についてのメモから、本人紹介をしよう。(〔 〕内は引用者の付加)

明治40年(1907)2月28日、父亀山六次(新聞記者)、母ぎんの長子として〔大須〕裏門前町に生れる。虚弱の少年時代を過ごし臆病かつ懶怠、自我に溺れて迷惑の他に及ぶことに気づかず、これらを病弱後遺症のせいにして浮わの空を彷徨して頽齡現在に至る。〔愛知県〕工業学校図案科に学びしほか学歴なく、不遜にも師をもためぬ淋しさは今更にして知る。昭和3年(1928)中日新聞の前身名古屋新聞に入社し〔整理部記者という〕気儘な勤めを重ね、のち昭和38年名古屋タイムズ社長に派遣され49年4月をもって辞任。この間、装本のために依頼されるままに作画できたのは人並みの趣味嗜好の一切ができなかった結果である。名古屋豆本は絵をかくこと、文章を弄ぶことの延長ともいべきもので1967年〔60歳〕の開板。〔平成元年(1989)82歳で没する〕



左から右へ堀川を南下 ③⑥堀端橋 ③⑧五条橋 ④⑩伝馬橋 (名古屋新聞 昭和10年頃) 10~11年に新聞連載された「街のハイキング」もある。上図は彼が日常身近に歩いた堀川端から採集した成果の一部である。

モデルノロジオ 考現学との出会い

上記にあげていない仕事に大正12年(1923)の関東大震災後に今和次郎が創始した考現学の採集がある。モデルノロジオはエスペラント語による造語で、考現学が震災後に誕生した意義は、今にちの私たちにとって他人事ではない。昭和6年刊の年鑑『考現学採集』に亀山が行なった「レビユウ・ガアル楽屋調べ 採集走り書(大須七ツ寺歌舞伎座)」が収録されている。それについて彼は「『レビユウ…』は、名古屋という場所での最初〔の考現学採集〕であると共に、私の生涯の中に考現学的思考が植付けられたという自覚がある」といつている。

その後亀山は、日中戦争激化のなか名古屋新聞上海特派員として戦争考現学を實踐し、昭和12年10月の新聞紙面を埋めることとなる。そうした流れのなかに、昭和10~11年に新聞連載された「街のハイキング」もある。上図は彼が日常身近に歩いた堀川端から採集した成果の一部である。



自画像(亀山巖の絵本 作家社 1975年)

沢井鈴一 「堀川文化」の命名・発掘・伝承者

万卷の書を読む志

多くの人が行き来し、多くの文物が運ばれてきた堀川と本町通りによって、名古屋独特の文化が生まれた。隅田川の流れによって江戸文化が生まれ、鴨川の流れによって京都の文化が育ってきたのと同じように、名古屋の文化は、堀川と本町通りによって生まれ、育ってきた。「堀川文化」は、名古屋の人々の精神を形成してきた文化だ。

——『堀川端ものがたりの散歩みち』より

沢井鈴一はまだ過去的人物ではない。名古屋・堀川の再生を「堀川文化」という語でテーマ化し、著述や遺産の掘りおこしを通して、若者から高齢者まで巻き込み情熱的に取り組んできた成果は、なお現在進行形だ。

彼は昭和14年(1939)春日井市の農家に生まれた。明治大学文学部で舟橋聖一に教えを受け、「万卷の書を読む」ことを自らに課したという。卒業後は市邨学園高校(現:名経大市邨高校)で国語科を教えた。在職中に戦争について生徒と共に調査し、同校敷地にあった「名古屋陸軍兵器補給廠」や隣接の「名古屋陸軍造兵廠」、「21世紀に語り継ぐ愛知県被爆者の実態」等を冊子にまとめ、各種の教研集会で発表する。さらに「シベリアから持ち帰った絵画展」「被爆者の描いた絵画展」を同校で開催し、定年の年に「浮世絵は楽しい 沢井コレクション百選」展を電気文化会館で実現、浮世絵図録解説を執筆刊行する。そして教育生活の総決算たる『伝えたい ときめきを共有する教育』を刊行した。



堀川文化に体を張っていた頃

堀川文化に筆を揮った晩年 浮世絵の現場つきとめる

自著の好評を教職の区切りとするかのように、平成12年(2000)12月に有志の市民グループとして堀川文化探索隊を結成する。さらに翌年、当時の中区役所まちづくり推進室と共同で堀川文化を伝える会の前身となるチームを立ち上げ、ほぼ毎年『堀川端ものがたりの散歩みち』『堀川端ふしぎばなし』『花の名古屋の碁盤割』『名古屋本町通りものがたり』『名古屋広小路ものがたり』『名古屋の街道をゆく』『名古屋大須ものがたり』とたて続けに執筆した。

そうした活動のなかで、収集した明治の浮世絵師・川瀬巴水の「名古屋堀川」取材先を突き止めることもあった。それは今、納屋橋東南の船着場南にある現場付近にパネル展示されている。惜しくも平成27年7月に病没。なお堀川文化に関する沢井の膨大な著述は(校閲不足はまああるが)Network2010の名古屋情報発信サイトで閲覧することができる。



名古屋堀川(川瀬巴水 昭和10年)